

日中科学技術

No. 55

1987.12.20

発行所
日中科学技術交流協会〒113 東京都文京区湯島 1-7-11
南新ビル 6F TEL.(03)815-7241

会長として中国公式訪問

会長 橋 口 隆 吉

1987年3月私は本協会の会長に就任したので、就任の挨拶を兼ねて、6月21日から28日までの8日間、会長として中国各機関を公式表敬訪問した。方毅國務委員閣下を始めとして多くの方々にお会いして、ご挨拶をすると共に、今後の日中科学技術交流のあり方について意見を交換し、また本協会の現状および近い将来の事業計画について多方面の方々にお話をして来た。以下に簡単に表敬訪

問、接見、会見の様様を述べると共に、交流会見の写真を載せることとする。ただ私の方から述べた本協会の現状と将来の事業計画については、本誌前号に一部述べたし、また今後本誌に述べる機会も多いから、ここでは省略することとする。

まず國務委員方毅先生とお会いした時のことを述べなければならない(写真1)。6月23日(火)の午後人民大会堂において、約1時間にわたって接見



写真1、右方毅國務委員、左橋口会長、
後列右張松林氏、左陳俊良氏。
人民大会堂において。

して下さった。古い友人だからと云って、非常に親しくお話下さった。今世界中がフィーバーしている高温臨界温度酸化物超伝導体に中国も大変な熱を入れているが、科学技術担当の國務大臣として、この超伝導物質の研究開発の行政的最高指導の任に當っておられる。科学技術交流の各般の話の後、話は方毅先生の書の話に及んだ。先生は大変立派な書を書かれる書家である。方毅先生にすすめられて、人民大会堂からの帰りに、崔泰山副局長と共に安徽四宝堂(書画や書道具を売る北京の有名な店)に方毅先生の書を見に行った。「奇松」という額と「怪石」という額があった。横2メートル半位の大きなものである。私の撮った写真の出来の良い方「怪石」を写真2に掲げておく。



写真2, 方毅國務委員の書。安徽四宝堂にて。

方毅先生と私との会見はその日の夕方のテレビニュースで放映され、翌日の人民日報に報道された。残念ながら私はそのテレビを見ることができなかったが、見た人から話を聞いた。人民日報の記事はここに写真3として掲載しておく。

人 民 日 報

1987年6月24日 星期三 第三版

▲國務委員方毅6月23日下午在人民大会堂会见了日本中国科学技术交流协会会长桥口隆吉, 双方就今后加强中日两国民间的科技交流等事宜进行了亲切的交谈。

写真3, 方毅國務委員と橋口会長の会谈の記事。人民日報。

以下各訪問機関の面接者との会談とその写真を日程の順に載せることとしよう。

6月22日(月)午前。中国科学院。周光召院長はシンガポールに出張中でお会いできなかった。孫鴻烈副院長と中国科学院で会談した(写真4)。

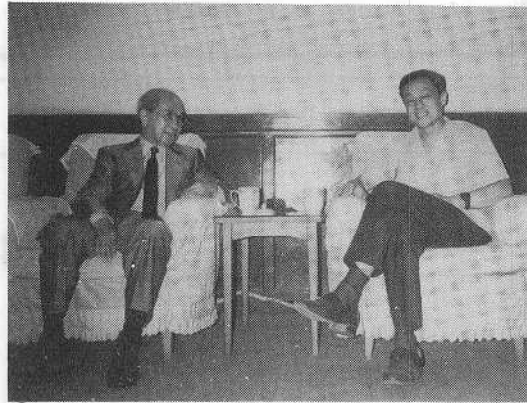


写真4, 右 孫鴻烈副院長, 左 橋口会長。
中国科学院において。

崔泰山副局長, 張松林氏, 陳俊良氏らが同席された。中国科学院と本協会とは極めて密接な交流を行っているが、本協会が計画している結晶成長のシンポジウム(9月開催)に中国科学院を窓口として約20名の中国研究者を招待したいこと、また中国科学院と本協会の共催によって、本年中に(12月頃)上海で生物科学関係のシンポジウムを開きたいことなどを本協会として提案した。また中国科学院が引き続き年間10名の日本人科学技術者を本協会の推薦にもとずいて招待して下さることを確約した。なお孫鴻烈副院長のご招待による宴が翌日夕刻四川飯店で開かれたが、その時には中国科学院物理研究所の李林教授(30年来の古い友人)も参加された。

6月22日(月)午後。国家自然科学基金基金委員会の師昌緒副主任他の各氏と会談(写真5)。師昌緒教授とは約40年前からの誠に古い友人である。師教授と最初に会ったのは1949年に米国においてであった。写真5の他の方々はいずれも上記基金委員会の各自然科学部門の責任者であるが、写真に向って私の右隣は李恒徳清華大学教授(物性物理)で5年程前から親しくしている友人である。



写真5, 左から石俊義処長, 張培容副教授, 師昌緒副主任, 橋口会長, 李恒徳教授, 烏家驥局長, 范元炳副教授。国家自然科学基金委員会にて。

李教授からこの委員会に寄附をしてくれる日本人を探してくれと頼まれた。もしも実現すればその人の名を冠した基金をつくり, 日本との学术交流特に日本への研究者派遣に使いたいとのことであった。夕刻には北海公園の皇帝花園飯店で師副主任招待の宴があり, 写真の全員が出席した。

6月24日(水)午前。中国科学院物理研究所に李林教授を訪ね, 酸化物高温超伝導の研究を視察する(写真6)。中国でも徹夜に次ぐ徹夜の24時間体制で高温超伝導の研究を行っている。世界中どこでも同じである。

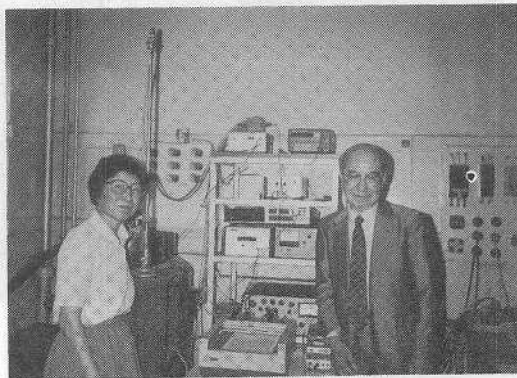


写真6, 左 李林教授, 右 橋口会長。物理研究所の酸化物高温超伝導研究室にて。

6月24日(水)昼。竹山太郎北大名誉教授(本協会理事)が顧問として来ておられる北京有色金属研究総院を視察し, 万群副院長のお招きで昼食を共

にし研究の様子を聞く。盧忠効氏からも話を聞く。

6月24日(水)午後。中国科学技術協会の高鎮寧副主席その他の方々と科学会堂において会見(写真7)。同席された陸達教授は中国金属学会副理事长でもあるが, 私が1975年に訪中した時に大変お世話になった。やはり同席の葉正明副部长には中国および日本で何度もお会いしている。葉副部长から今回特に依頼を受けたことは, 製鉄産業における省エネルギーの問題について講演と指導ができる第一級の専門家数名を日本から送ってほしいということであった。夕刻には高鎮寧副主席の招宴が魯味齋で開かれた。

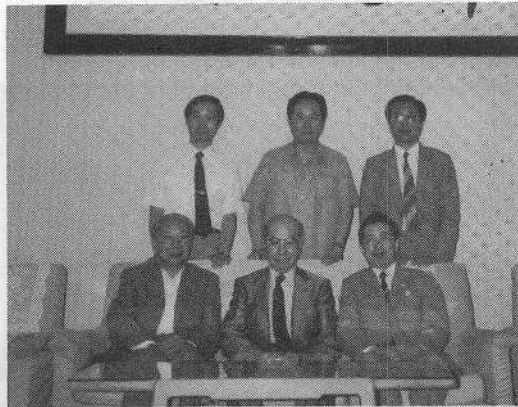


写真7, 前列左から陸達教授, 橋口会長, 高鎮寧副主席。後列左から王瑞林副処長, 葉正明副部长, 林振申部長。科学会堂にて。

6月25日(木)午前。北京鋼鉄学院を訪問し, 明年9月上海において開催予定の日中金属物理・物理冶金シンポジウム(本協会が日本側主催者)の打合せを行った(写真8)。

6月25日(木)昼。中国国際人材交流協会喬世昌副所長招宴と懇談の会が北京ダックの便宜坊で開かれた(写真9)。同席の王虎副部长は東京の同協会の日本国駐在員事務所代表でもあり, 東京でお会いしている。この協会は日本を特に重視し, 西独に次いで日本(東京)に駐在員事務所を開設している。現在3番目の米国の事務所が既に開設されている。中国の人材の日本への派遣についていろいろ懇談した。



写真8, 左から王佩璇教授, 竹山太郎北大名誉教授, 橋口会長, 張文奇前院長, 田中卓副教授, 袁逸講師。北京鋼鉄学院にて。

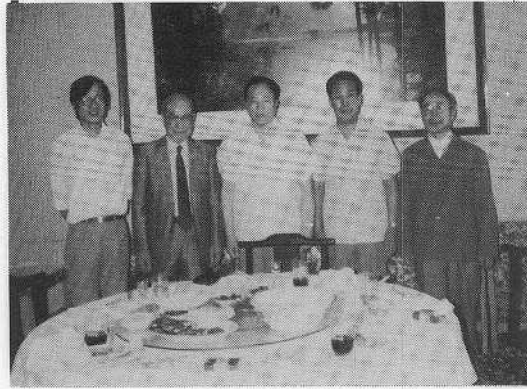


写真10, 左から李纓副処長, 橋口会長, 楊浚理事長, 劉東昇副主任, 倪信興高級工程師。中国科学技術交流中心招宴にて。

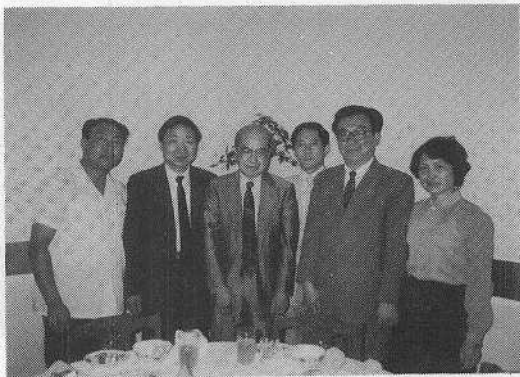


写真9 左から張松林氏 (中国科学院), 武永興副秘書長, 橋口会長, 王虎副部長, 喬世昌副所長, 陳憶渝工程師。中国国際人材交流協会招宴にて。

6月25日(木)夕刻。中国科学技術交流中心の楊浚理事長の招宴と懇談会が海味餐厅で行われた(写真10)。楊理事長は1986年に東京で開かれた第3回日中民間人会議第3分科(科学技術)の中国側主査をつとめられたので、私はその時既にお会いしている。この交流中心は非常に多数の科学技術者の交流を諸外国との間で行っているが、日本との間はむしろ少い位である。今回特に楊理事長が提案されたことは、日本で定年退職となった優れた科学技術者を中国に招聘したいということであった。

6月27日(土)午前。中国科学院上海分院と本協会

との間には密接な交流があるし、私個人としても大変お世話になっているので、今回も是非上海分院を訪問することとした。古い友人である曹天鈞院長にお会いしたかったが訪ソ団の団長としてソ連に出張中のご不在であった。しかし姚介興副院長にお会いすることができた(写真11)。今年中に上海で生物科学関係のシンポジウムを中国科学院と本協会の共催で開きたいという構想を持っていることなどをお話した。

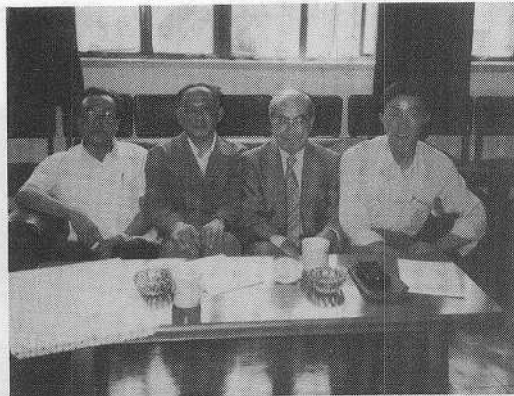


写真11, 左から万鐘漢主任, 姚介興副院長, 橋口会長, 開建偉氏。中国科学院上海分院にて。

この一週間自由時間の全くないハード・スケジュールであったので、土曜日の午後は上海の市民の中に入って行ってリラックスしたいと思い、通訳の開建偉氏に同行してもらって一般市民のデパートや喫茶店でくつろいだのであった。

1979年中国天文学の旅

東京大学名誉教授 藤田良雄

中国と日本における天文学の交流はこの数年スムーズに進んでいると言ってよいだろう。

日本から中国に行って講演又は集中講義をしたケースもあるし、中国あるいは日本で特別な天文学の問題をトピックしたワーク・ショップが開かれたこともある。

中国の若い研究者が日本の天文関連施設に長期滞在している例もある。東京大学に付属の岡山天体物理観測所に半年或いは更に長期にわたって滞在して研究を続けていると言う話も聞いた。日中科学技術交流協会が期間延長のための滞在費の補助をして下さったこともあった。

このように日中両国が天文学の分野でも益々相互協力が盛んになっていることは喜ばしい限りである。

私は今から8年前の1979年、日本学士院から派遣された訪中代表団（団長は和達清夫日本学士院長（当時））の一人として10月26日から約2週間中国で過ごした。いろいろの専門の方と一緒に旅をした。その旅行記は日本学士院紀要第37巻（1981年）、48に記載されているが、私の関係している天文学についての訪中記録を遅ればせながらここに記して、何かのお役に立つならば幸いである。

10月30日(火)

柳修彰（通訳）さん、北京天文台の所員李峯さんと一緒に、朝7時45分北京市内の宿舍迎賓館（旧釣魚台）を出発、160キロの道程を経て、10時50分北京天文台（観測站）に着く。北京天文台では天体物理学関係のプログラムとして閃光星（フレア・スター）、シェル・スター（外層殻のあ

る構成）、新星、近接連星等の研究の外、技術開発の部門もあるという。観測施設として60cmのカセグレン反射望遠鏡、90-60cmのシュミット望遠鏡（5°3の対物プリズム付）、2本平行に並べた40cmの写真望遠鏡が活動しているとのことである。台内を詳しく案内していただいた。



北京天文台にて

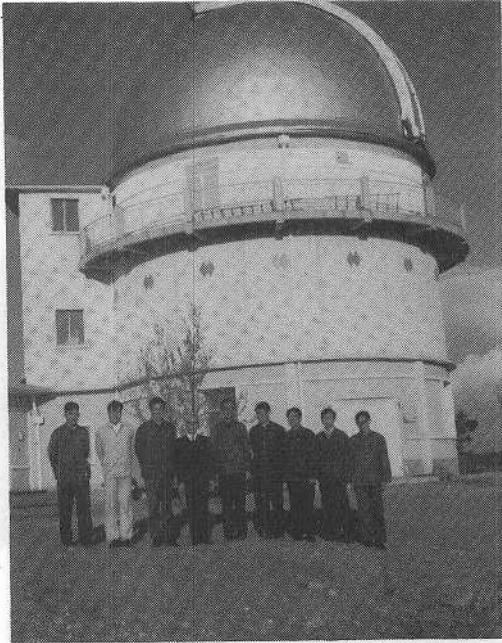
10月31日(水)

王象龍さんの案内で市内にある北京天文台を訪ねた。台長梁管増さんの案内で施設を見せていただいた。ここでは主として子午線天文学に関する装置、子午環、アストロラープ、子午儀、人口衛星追跡赤道儀等が活躍している。その外太陽のフレア・パトロール(H α 線)、2mの電波望遠鏡（3mm、10mmの波長測定）等を見せていただいた。

11月2日(金)

石林から昆明に着いた。柳さんと共に雲南天文台へ。張柏榮台長の出迎えを受けた。ここは1972年に建設が始まり1975年竣工したが、続いて新しい施設を増築中であつた。一年を通じて平均温度15℃、2,000mの高地で夜の晴天日数は200日、太陽観測の出来るのは300日を越えるという。プ

プログラムは保時、人口衛星追跡、50 cm シュミット、アストロラブ (光電)、太陽のフレア・パトロール、分光器による D. H. K 線観測、太陽電波観測 (1.2 m 及び 2.2 m の放物鏡で波長は cm 領域)、天体測光等である。東独ツァイスで作られた新しい 1 m の反射望遠鏡にはカセグレンのグレーティング分光器が付けられてあった。恒星物理関係の数人の台員と懇談した。現地地点より更に奥地には大望遠鏡を設置するに好適な場所があるとのことである。



雲南天文台にて

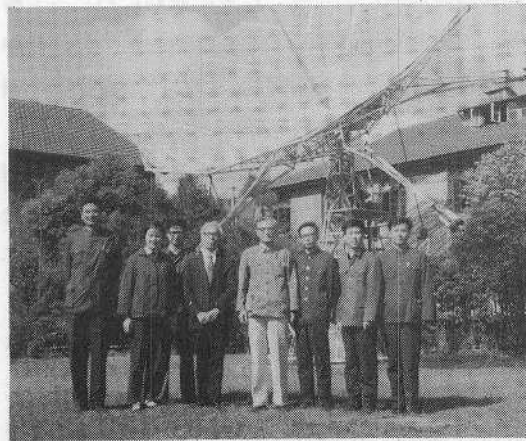
11月5日(月)

貴陽に着く。地球化学研究所の李応農さんの出迎えを受けた。この研究所は1962年に開所した大きい施設である。同位元素 (年代測定)、宇宙化学 (いん石)、有機地質 (地層の有機物、油田)、鉱床の地球化学、鉱石・金属・貴金属・花崗岩、地球深部構成物・高圧実験、第4紀地層年代学鑑定、黄土、鉱物地質構成 (光学、電気、磁気による)、鉱物の基礎研究、分析化学、希元素、環境化学等広汎な領域にわたり実験装置の部分品を作る工場も設置されている。1976年3月8日に落下した巨大な吉林いん石について研究が進んでいるという話であった。その日は所内見学で一日を終わっ

た。翌日朝8時45分から約30名の所員に「炭素星における $^{12}\text{C}/^{13}\text{C}$ の相対比」という題目で2時間の講演をした。終わってから30分の質疑応答があった。副所長謝先徳さん始め皆さん熱心に聴いて下さった。

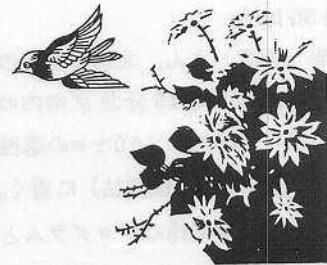
11月8日(休)

午前8時30分柳さんと上海天文台へ。ここは所員200人の大所帯である。なおここから28キロの余山には光電観測用の40 cm 屈折望遠鏡がある由。ここでは主に子午線天文学に関連したプログラムで、緯度、VLBI、地球自転、原始時計、H-Ce 時計等の研究が主体となっており、観測は測光、アストロラブ (光電)、子午儀等使用とのことであった。案内していただいてから、所員に貴陽で話したのと同じ題目で約1時間の講演をした。



上海天文台にて

以上のように、忙しい日程であったが、若い天文学者と話し合う機会に恵まれた。それから約8年、私の訪れた天文台や研究所は著しい飛躍を遂げたことであろう。



金属物性訪中記録

東京大学物性研究所 竹内 伸

日中科学技術交流協会の御紹介により、中国科学院の招待を受け、本年8月16日より9月5日まで中国各地に滞在し、多数の研究者と交流を行った。

まず上海から中国に入り、17日に上海冶金研究所、18日には上海珪酸塩研究所を訪問した。上海冶金研究所は約50年の歴史をもつ伝統的な研究所であり、1,200人以上のスタッフを擁する。幾多の変遷を経て、現在では、研究所の名称と異なり、半導体材料および半導体デバイスに研究の主力が置かれている。準備した講演を行うと共に、許教授を中心とする材料物性関係の研究室を訪れて討論を行った。珪酸塩研究所は、元は冶金研究所と一体の研究所であったものが1960年に分れて独立した研究所である。約1,000人を擁し、約8割が応用研究、新技術開発に関っている。上海郊外に工場を持ち、ルビー、石英などの驚くほど大きな単結晶を作成しており、それらは米国などに輸出しているとのことであった。

19日に上海から合肥に移動し、20日、21日は固体物理研究所、22日午前中は科学技術大学を訪問した。固体物理研究所は、瀋陽の金属研究所の葛教授のグループが中心となって1982年に創立された新しい研究所である。葛所長は金属の内部摩擦研究の先駆者として世界的に有名であり、筆者にとっても旧知の方である。70を越えてなおかくしゃくとして研究しておられる。写真は研究所の応接室で撮影したもので、左から葛所長、筆者、何教授（所長夫人）、董副所長である。現在は100人強の小じんまりした研究所で、内部摩擦を主要な手段とした金属の欠陥と塑性に関する研究が中心である。将来は半導体など新しい研究分野の増設



が計画されている。この研究所では、筆者の専門に近いこともあって、3テーマの講演を行い討論を行った。科学技術大学は中国科学院に所属する唯一の大学であり、研究スタッフ3,000人余で、殆んど全ての理工系の分野をカバーする大きな大学である。現在、さらに広大な第2キャンパスを設営中で、1991年には全学生数が6,500人になることが予定されている。時間の関係で基礎物理センターの設備とその研究内容の一部を見るに止まった。この大学では、少年班と呼ばれる英才教育が行われているのも特徴である。11才で入学した例があるとのことである。

北京を経て23日に瀋陽に移動し、24、25日と瀋陽金属研究所の世話になった。金属研究所は第2次大戦直後鉄鋼の研究所としてスタートしたが、その後は磁性材料、表面技術などの新しい分野に殆んどが移行した。ここでは基礎部門の郭教授を中心とするグループの研究活動を見聞した。郭教授は北京の電子顕微鏡センターの所長も兼任しておられ、中国の電子顕微鏡の研究分野の指導者として有名で、筆者もお会いするのが今回で5度目であった。この研究所では多数の講演を予定して

いたが、筆者が一時体調をくずしその責を十分に果たすことができなかつたのは残念であった。

再び北京に戻り、27日は以前にも訪れたことのある有色金属(非鉄金属)研究総院(中国科学院には属していない)を訪れ、全体の研究活動に関して討論を行った。1,400人の研究員を擁し、Ti合金などのいわゆる非鉄金属のみでなく、半導体結晶、超伝導材料の研究開発および生産をかなり大規模に行っている。28日には物理研究所を訪れ、旧知の李林、および李方華の両教授とお会いし、主として結晶学関係の研究活動の紹介を受け、また筆者は準結晶に関する講演を行った。この研究所は主として実験物理、それも物性関係の研究が主流を占め、筆者の物性研究所とかなり性格が似ている。また、酸化物高温超伝導体を発見した研究所として有名である。高温超伝導体の研究はこれまでに訪れたどの研究所でも手掛けていたが、特にこの研究所での力の入れ方は大きく、現在大学院生を含めて200人近くの人がかかわっているとのことであった。

29日には観光案内をしてもらい、30日から9月5日までは、郭教授が組織した「準結晶に関する国際ワークショップ」に出席したが、ここではその詳細は省略する。

以上が3年振りに訪問した中国滞在記録であるが、今回の滞在中に特に強い印象を受けた2、3の事柄についてもふれたい。まず、自由化政策の

影響で、女性の服装が派手になるなど街の雰囲気はずい分変わったように思われた。研究の面でも数年前より競争原理が大幅に取り入れられている。特に応用研究の分野では、政府から直接受ける研究費は殆んどなく、各自が企業(公司)と契約して開発研究費を得なければならない。その代り、その研究成果による純利益の8%までは、研究者のボーナスとして個人所得とすることができる。この制度によって、政府からの給料の何倍もの所得を得ている人が少なくないとのことであった。この話を聞いて、基礎研究の分野に優秀な人材を確保するのが困難になるのではないかとの危惧をいだかざるを得なかつた。

従来は最先端の科学研究器機の殆んどは世界銀行からの借款によって輸入していた。しかし、最近では、超高真空機器をはじめ、走査型電子顕微鏡、MBE装置などの国産化が大幅に進んでいる。また、多額の研究投資を行い特に優秀な設備を整えた研究施設を「開放研究室(open laboratory)」として、中国国内はもとより海外にも開放して、研究の能率化と研究協力体制を確立しようとする制度も注目された。

最後に、各地で通訳および案内の役をお引き受け頂いた方を始め、中国滞在中にお世話になった方々の暖かいおもてなしに対し、紙面を借りて心から感謝の意を表したい。

「結晶成長」シンポジウム報告

学習院大学理学部 小川智哉

日中シンポジウム「結晶成長と放射光などによる結晶の評価」が、昭和62年9月7日から10日まで文部省高エネルギー物理学研究所レクチャールで開催された。

このシンポジウムは当初日中科学技術交流協会

創立10周年記念行事として計画されたが、同協会の公益法人化の延期に伴い運営上は財政的な困難を伴うこととなった。

しかし幸い万国博覧会記念協会よりの補助と高エネルギー物理学研究所・放射光実験施設、財高

エネルギー加速器科学研究奨励会, 日本学術振興会・第145委員会, 応用物理学会・結晶工学分科会, 日本結晶成長学会ならびに別表10社の御協力を得て成功裡に終了することが出来たことを報告し, 御協力下さった諸機関, 諸氏に心から感謝する。

このシンポジウムの準備は大枠を決めるための会議を昭和61年11月に開いた時に始まった。

すなわち, まず日本側の講演内容の大まかな所を決め, これに整合するような形で中国側に科学者を選んでいただくというプロセスを逐次行うという方法を取った。

この結果, 中国側参加者21名が決まったのは8月中旬であったが9月6日(日)には全員揃って成田に着かれた。

次にシンポジウムの大要を述べよう。

7日(月)の午前中には高エネルギー物理学研究所を見学し, 午後から日中科学技術交流協会会長・橋口隆吉東京理科大学教授, 高エネルギー物理学研究所放射光実験施設長・千川純一教授, 中国科学院学術討論会代表団団長・許振嘉教授の挨拶によりシンポジウムが開催された。期間中の出席者は115名(重複を含まず)であった。なおこの中にはシンポジウム出席のため来日した一行21名とすでに来日していた中国籍の科学者7名とが含まれている。

このシンポジウムで発表された講演は, レーザー母材用結晶, 非線型光学結晶, シリコン結晶, 化合物半導体結晶, 分子線エピタクシー法における結晶成長膜厚の制御法, MOCVD (有機金属ガスの化学輸送法的結晶育成), 生体内における結晶成長, 生体高分子結晶, 感光材用結晶などの育成と放射光などを用いた結晶の評価に関するもので, 計37件と準結晶に関する招待講演1件の合計38件であった。このうち日本側の発表には, 半導体結晶の育成と評価に関するものが多く, 中国側の発表には光学用結晶を中心としたものが多かった。

この中には「高効率非線型光学結晶の探索」(山

東大学晶体材料研究所・蔣民華), 「自己励起型レーザー用結晶」(上海光学精密機械研究所・鍾永成)などの特筆すべき講演も含まれた。このシンポジウムから豊富な資源と厚い研究者層に支えられた中国の無機化合物結晶に関する充実した学術研究の成果が読み取れた。

また, 中国側参加者のほぼ全員と日本人参加者の主だった人々が, 高エネルギー物理学研究所のドミトリーに宿泊し, 寝食を共にすることが出来たことは, 学術の真の交流に非常に有益であった。特に夜, 談話室で開かれた討論の輪は有益でかつ非常に楽しいものであり, 日中両国の学術交流の増進に資したように思われる。

最後に, 復旦大学の宗祥福教授が力説された「アジアにおける日中両国の地理的位置と学術文化における協力と前進の重要性」が強く印象に残ったことを記して筆を置きたい。

なお, 次の諸機関の見学会, 即ち科学技術庁・無機材質研究所(9/10), 工業技術院・機械技術研究所・電子技術総合研究所(9/11), 東京大学(9/12), 日本電気(株)基礎研究所(9/14), 理化学研究所(9/16)といった日本の主だった研究所と大学の見学を行ったが, 日本の実態を一層正しく知ってもらう機会となったこととと思っている。

(株)アスカル・オリンパス光学工業(株)・(株)工業調査会・精工化学(株)・ニチデン機械(株)・日本電波工業(株)・ラトックシステムエンジニアリング(株)・ラピラス電機(株)・理学電機(株)・若井田理学機器(株)

第13回理事会議事録

日 時: 1987年6月30日(火) 13:00~16:00

場 所: 一ツ橋学会館 306号室

出席者: 会長 橋口隆吉

理事 有山兼孝, 弥永昌吉, 上坪宏道,
鈴木昭憲, 春原亘, 土屋喜一, 和達清夫
以上のほか委任状提出出席20名。

1. 前回議事録について一文書により承認済み。

2. 坂部知平氏及び竹山太郎氏を理事に推薦する件について—会長から説明があり、全員が推薦を承認。

3. 久野洋監事の退任に関し、後任を長岡技科大の菅野昌義氏に依頼する件について、会長から説明があり、全員が承認。

4. 本年度総会(7/21)に提出する議案の審議

(1)昭和61年度事業報告及び昭和62年度事業計画(案)—会長より説明後質疑・意見交換、一部訂正ののち総会へ提出。

(2)昭和61年度収支決算及び昭和62年度収支予算(案)—春原理事より説明後、質疑・意見交換、一部訂正ののち総会へ提出(事務局長の退職金、退職手当積み立てについて)

(3)本協会規約の一部改正(案)—顧問制の導入・常任理事の廃止に関連した文言の訂正について会長から説明があり、一部訂正ののち総会へ提出。

5. シンポジウム2件の中間報告

○結晶成長と評価シンポジウム—参加者が内定(会長訪中の際、科学院から渡された名簿の披露)、科学院外事局からは崔泰山氏・張松林氏陳俊良氏の3名の出席を得られることになった。(後日、崔・張2氏になった)

○核研究用加速器シンポジウム—理化学研究所での開催に変更

6. 橋口会長の訪中報告—表敬訪問・研究機関訪問

7. 野上基金の取扱いについて—10周年を記念して基金の果実の範囲内での交付(1人10万円)とする。募集要項・審査方法などの具体案は幹事会で検討する。

第14回理事会議事録

日時：1987年7月21日(火) 13:00～14:00

場所：一ツ橋学会館 306号室

出席者：会長 橋口隆吉

理事 有山兼孝、越智勇一、窪田雅男、

坂部知平、春原亘、土屋喜一、藤田良雄

和達清夫 以上の他委任状提出19名出席。

1. 総会運営について

(1)a：会員総数356名に対し、委任状提出を含め出席217名の見込み。

b：議長は、窪田常任理事の提案により橋口会長を選出の予定。

c：議事録署名人は議長指名により鈴木、春原両会員を予定。

(2)第1号議案：会長説明と窪田常任理事報告により総会提案を承認。

(3)第2号議案：会長説明と窪田常任理事報告により総会提案を承認。

(4)第3号議案：議事説明、趣旨了承し総会提案を承認。

(5)第4号議案：議事説明、趣旨了承し総会提案を承認。

昭和62年度定期総会議事録

1. 日時 昭和62年7月21日(火) 14:00～16:00

2. 場所 一ツ橋学会館 306号室

3. 開会 午後2時、出席者17名、委任状提出出席者197名、計217名。会員総数356名に対して出席217名。

4. 議長選出 議長は橋口会長にお願いしたいとの提案があり全員賛成。

5. 議長挨拶 御多用中のところ本日のご出席に謝意を表す。議案の審議をお願いしたいと挨拶があった。

6. 議事録署名人の選出 議長から鈴木・春原両会員の指名があり、全員賛成。

7. 議事

(1)第1号議案(別冊参照—会員に別送)

①昭和61年度事業報告…会長より原案について説明が行われた。

②昭和61年度収支決算書

③昭和61年度監査報告

窪田常任理事より原案について説明が行われた。続いて、監事欠席のためその委任に基

づき、同決算監査に立ち会った窪田常任理事から帳簿書類その他決算について報告があった。これに対し、表記方法について質問があり、今後は備考欄を活用してよりわかりやすいものとする事とした。かくして第1号議案を全会一致で可決した。

(2)第2号議案 (別冊参照-会員に別送)

①昭和62年度事業計画(案)…会長より原案について説明が行われた。

②昭和62年度収支予算(案)…窪田常任理事より原案について説明が行われた。以下に主な質疑・応答の項目を示す。

i) 今後の会員増・増収入に対する見通しについて。

ii) 中国科学院との共催「バイオケミストリー」シンポジウムの具体案について(立案中)

iii) 中国人材交流協会について。

第2号議案について特に異議の申し立てもなく、原案は承認された。

(3)第3号議案 本協会規約の一部改正

創立後約10年を経過し、実情に合わなくなった規約を改正する別紙案について、会長より説明があり、その後異議の申し出もなく原案は承認された。(原案、会員に別送)

(4)第4号議案 理事及び幹事の改選

今総会は、役員改選期に当たっているが如何に改選すべきかの問いが会長から出された。それに対して現役員が次期も継続すべきであるという意見が出され、出席者全員により全役員の新選が承認された。但し、かねてより退任の希望が出されていた久野洋監事の退任を認め、その後任として菅野昌義会員を監事に推薦することを承認した。

ここで総会を一時中断して、新任(再選)の理事による理事会を開き、橋口理事を会長に選出し、有山、越智、茅、和達四理事を顧問に推薦した。その後総会を再開して、会長から理事会の結果を報告した。

8. 閉会 午後4時

第1回幹事会議事メモ

日時 1987年4月11日(土) 15:00~21:00

場所 一ツ橋学会館 311号室

出席者 委員長 橋口隆吉

委員 小川智哉, 上坪宏道, 窪田雅男

坂部知平, 鈴木昭憲, 春原亘, 土屋喜一

1. 3月4日の第12回理事会において設置が決定した幹事会の第1回会議を開催した。
2. 第12回理事会議事録, 有山前会長の会報用原稿「会長退任のご挨拶」及び「本協会法人化について」に基づいて、経過報告が行われた。
3. 6月開催予定の理事会及び7月開催予定の総会に提出する1986年度決算及び1987年度予算案の作成を窪田委員に担当していただく。
4. 前項と同じく理事会及び総会に提出する1986年度事業報告及び1987年度事業計画案の作成を橋口委員長が担当する。
5. 日中シンポジウム「結晶成長と放射光などによる結晶評価」(9月7日~10日, 筑波高エネ研にて)に関する中間報告(小川委員)
6. 会長の中国大使館訪問報告
7. 会長の表敬訪中についての中国側との進路経過報告(橋口委員長)
8. 本協会の今後のあり方については今後自由論を続ける。
9. 各委員の実務担当決定
10. 「日本」改訂版の編集は本協会の財政状況が好転するまで凍結。

第2回幹事会議事メモ

日時 1987年5月21日(木) 17:00~21:00

場所 本郷 学会館分館 9号室

出席者 委員長 橋口隆吉

委員 小川智哉, 上坪宏道, 窪田雅男

坂部知平, 鈴木昭憲, 春原亘, 土屋喜一

1. 前回議事メモ確認(朗読)

- II. (1)本協会の基本原則 (会報用会長就任挨拶の原稿朗読, 科学新聞の記事についての説明)
- (2)会費滞納者の従来の扱いの確認 (催促の回数など)
- (3)総会当日午後の創立10周年記念行事—大使館とのその後の連絡・経過報告—まだ確定はしていない。
 - 大使館でできない場合は会費制でスナック・パーティを開くか。
 - 総会の続きとして協会のあり方についての、ディスカッションの場にしてはどうか。
 - 講演会—有名な方なら人がたくさん集まるが科学院の崔泰山さんはどうだろうか。
 - 総会とパーティは切り離して考えることとし、張参事官とは会長が改めて話をする。
- (4)規約の改正—本年度総会において規約を一部改正する (常任理事の廃止, 顧問制など)
- (5)昭和61年度事業報告・昭和62年度事業計画(案)—6月理事会に会長が提出—前書は長いものにしない。また、財団化の失敗については簡単な表現にする。
- (6)昭和61年度決算報告・昭和62年度予算(案)—窪田委員より説明 (新会計基準による)
 - 「日本」は凍結する。(62年度予算には組み込まない)
 - 野上基金についての特別会計への移行ということで具体案を理事会で検討する。第1回交付は本年中に行い、そのための審査委員会の設置を検討する。
- (7)4月例会会計報告 (窪田委員)
- (8)賛助会費の納入状況
- (9)賛助・個人会員の増募について—それぞれ心当りに声を掛けて入会を奨める。
- (10)幹事会委員を中心とする訪中団—費用は個人負担。
- (11)会員名簿作成の方針について—ワープロのフロッピーにまず入れる。
- (12)訪日・訪中事業の進行状況—東大物性研竹内伸教授(科学院招待), 都立大半谷教授(検討中)

(13)会報印刷の改善—紙を変更, 写真を増やす, 題字を大きく読みやすく。

~~~~~  
< 会 告 >

第3回日中金属物理・物理冶金討論会

- 日時：1988年9月21日(水)～25日(日)  
会議後観光旅行あり。
- 場所：中華人民共和国・上海
- 日本側主催組織：日中科学技術交流協会
- 日本側世話人：橋口隆吉(東理大), 竹山太郎(在中国), 石田洋一(東大生産研)
- 企画概要：上海地区の金属研・鉄鋼研・セラミックス研・上海交通大学などの訪問, 近くの観光地黄山などへの観光も含まれる予定。また今回は一般講演の他に招待講演も計画している。
- 費用：日本側参加者の旅費, 中国国内滞在費は各自が自分の分と同伴者の分を然るべき財源から獲得する。(以後これを自己負担と称する。)
- 予備登録：本討論会に興味を持つ方は本協会に予備登録用紙を請求されたい。予備登録の締切は1988年1月末。会議日程, 予稿締切日, 本登録締切日, その他詳細は1988年2月初めに連絡する。

目 次

|                     |      |    |
|---------------------|------|----|
| 会長として中国公式表敬訪問       | 橋口隆吉 | 1  |
| 1979年中国天文学の旅        | 藤田良雄 | 5  |
| 金属物性訪中記録            | 竹内伸  | 7  |
| 「結晶成長」シンポジウム報告      | 小川智哉 | 8  |
| 第13回理事会議事録          |      | 9  |
| 第14回理事会議事録          |      | 10 |
| 昭和62年度(第12回)定期総会議事録 |      | 10 |
| 第1回幹事会議事メモ          |      | 11 |
| 第2回幹事会議事メモ          |      | 11 |
| <会告>日中金属物理・物理冶金討論会  |      | 12 |